『教祖伝』探究（25）

反対するのも可愛い我が子

前おやさと研究所長
深谷　忠一　*Chuichi Fukaya*

『稿本天理教教祖傳』142 頁に、

（教祖は）反対する者も拘引に来る者も、悉く可愛い我が子供である、と思召されて、いそ〳〵と出掛けられた。

とあります。

「親神は、信じる者にだけではなく、反対する人たちも含めて、全ての人間にとっての親なる神であり、その親神の子供たる全人類は兄弟姉妹である」というのは、天理教信者にとっては常識ですが、世界の歴史・宗教事情からすると、必ずしも当たり前の考え・教説だとは言えません。むしろ、人種、民族の違いや男女の性差で優劣を決めたり、思想、文化、社会的地位などの違いでお互いを区別・差別する。異教徒は排斥することが、世界の多くの宗教の歴史なのであります。

たとえば、旧約聖書（『聖書 口語』日本聖書協会 1955 年）には、

ヘテびと、アモリびと、カナンびと、ペリジびと、ヒビびと、エブスびとはみな滅ぼして、あなたの神、主が命じられたとおりにしなければならない。これは彼らがその神々を拝んで行ったすべての憎むべき事を、あなたがたに教えて、それを行わせ、あなたがたの神、主に罪を犯させることのないためである。（申命記第 20 章）

と、他宗教の神を信仰する人たちを徹底的に排除せよとの記述があります。また、

そしてあなたの神、主がそれをあなたの手にわたされる時、つるぎをもってそのうちの男をみな撃ち殺さなければならない。ただし女、子供、家畜およびすべて町のうちにあるもの、すなわちぶんどり物は皆、戦利品として取ることができる。また敵からぶんどった物はあなたの神、主が賜わったものだから、あなたはそれを用いることができる。（申命記第 20 章）

などの、男性と女性・子供は別物扱いのような記述もあります。

また、奴隷に関しても、イスラエル人が多くの奴隷を持つことは、他の財産と同じく、神のイスラエル人に対する恵みとされていて、アブラハムも、イサクも、ヤコブも、皆、数多くの奴隷を所有しており、私有財産として売買していたのです。

そしてまた、古代ギリシア・ローマ時代も、奴隷が私有化され、贈与、売買、相続の対象とされた社会でありました。鉱山やオリーブ農園などに従事する労働奴隷の商品化が進み、征服された民族や戦争の捕虜のほかに、辺境の地から奴隷として輸入された異民族、負債を返済できない自由民、納税のため家長に売られた家族や、略取・誘拐された婦女子などが奴隷にされたのです。

有名な哲学者アリストテレスでさえも、その著『政治学』の中で、「奴隷は生きた財産である。奴隷と家畜の用途には大差がない。なぜなら両方とも肉体によって人間に奉仕するものだから」というようなことを述べているように、当時のギリシアでは奴隷制は当たり前であって、大哲人にとっても疑問を持つ余地などなかったのです。

また、仏教も宗教戦争とは決して無縁ではなく、お釈迦様が死ぬとその遺灰を巡ってインド全土が数十年にわたる大戦争に突入したと言われています。日本に仏教が伝来した時にも、仏教を受け入れるかどうかで、蘇我氏と物部氏の間に勃発しています。また、それ以降も、平安時代などには多くの寺院で僧兵が組織されていて、天台宗では、比叡山の延暦寺とふもとの三井寺・円城寺が、また、真言宗では、高野山と根来寺という同じ宗派中の寺が激しい戦いを繰り返してました。また、比叡山と南都仏教（奈良の興福寺など）との対立、その後の鎌倉期の比叡山と新興の禅宗との対立など、仏教内の宗派間の抗争は度々起こりました。

また、戦国時代にも、一向一揆（浄土真宗・本願寺派）が全国で武力蜂起し、武士や支配者と戦いました。日本史上で最大の宗教戦争といわれる天文法華の乱では、延暦寺の宗徒が京都の日蓮宗の 21 カ寺を焼き払い、応仁の乱の後に復興されていた京都の街も再び焦土と化したと言われています。

また、仏教の礼拝の対象である仏像を見ても、温和な如来や菩薩だけでなく、大威徳明王といわれる手に武器を持ち、背中に火炎、怒りに燃え盛る焔髪（えんぱつ）という姿の仏像が、怨敵降伏の戦いを祈願する仏として祭られていますし、八万大菩薩（八万神）が、弓矢八万（武運の神）として、武家・軍人の信仰の対象になっていたりもするのです。

ユダヤ教、キリスト教（カソリック、東方教会、プロテスタント各派）、イスラム教、また、仏教各派も、親神が直接この世の表に顕れられる以前の修理肥の教えとして、恩愛・慈愛・慈悲などの言葉を用いて、人間の幸せ・世界平和の実現を目指そうとしてきたのには違いありません。しかし、いずれの宗教・宗派も、すべての人種・民族・文化・思想・国・地域・老若・男女・貧富・社会的地位の違いを超えて、「反対するのも可愛い我が子」という立場に全面的に立っているかというと、必ずしもそうではない。“敵、罪人、悪人”などの言葉が使われるように、人間性悪説に立つ宗教がほとんどなのです。そして、異教・他宗派と対峙する究極的な事態になれば、ジハード（聖戦）、仏敵・仏罰などの言葉を前面に出して、暴力・武力に訴えることも辞さないのは、昨今の世界各地での宗教間紛争を見ても明らかなのです。

このような状況の中で、「反対するのも可愛い我が子」という教祖の親心、“全ての人間の性善説”をあくまで奉じていくのは、“言うは易し、行うは難し”で容易なことではありません。対立・反目・反対・拮抗・嫉妬・確執・敵対などの言葉を並べてみれば、天理教徒でも自らの心に全くそれがないとはなかなか言えないのではないか。思想の違い、主義主張の違い、生活環境の違いなどで、他者を区別・差別・排除する心が、私たちの心の中にも潜んでいるように思えるのです。しかし、その中を、人間はあくまで等しく親神の子供であり、相対するだれしもが、“性善なる存在”であることを信じて通る。それが、無実の身を監獄に引き立てる相手さえも、「可愛い我が子」と言われた教祖のひながたに学ぶべきことであり、対立抗争に明け暮れる世界に平和をもたらす礎になるのです。